

高潔な正義を求めて

——ヘンリー・ヴォーン小考 (十二)——

森田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の『火花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655) の第一部七三篇のうち、まだ本小考で取り上げていない作品が十一篇ある。今回はこれらを順に見てゆきたい。

灯火 ともしが The Lampe

辺りは真暗闇、〈恐怖〉⁽¹⁾ が這い忍び近づいてくる 陰を伴って、星々が頷いて眠り⁽²⁾ 暗い空気の中で紡いでゆく 火となって燃える糸を⁽³⁾ 物憂そうなたちポタルの寢床をびかびか飾るようなのを。それでも汝はここで燃えている、終日。その間私は

〈心配〉しながら休息し、暗い世界にこのような炎を与えている、汝が自らの炎を私に与えてくれるように。私は凝視める
あの時間を、汝と私の生命を奪い去るに違いないので、でも汝は私を上回る、私には分るのだ
汝の炎の中に迎えられたことが、全ては敬虔な行為だ、
汝の光は、〈慈愛〉であり、汝の熱は、〈熱意〉⁽⁴⁾ だ、
そして汝の高く昇る活発な火が頭に示すのは
相も変らず飛翔する〈献身愛〉だ、それから汝は涙を流す
汝が燃えている時静かに、すると温かな滴りが這ってきて
汝の長さを測定する、まるで汝は知っているみたいだ
蓄えがどのくらいでどれだけ時間が今自分に残されている

かを。

汝は涙一滴 無駄には費さない、何故といって 静かに
汝が溶けて滴りになり、それが蒸留されてゆくにつれて
その滴りは燭台の蠟燭受けに貯められてそこに留まり
全てが費やされた時汝の最後の確実な補給となるのだから
それが真物の悔悛であり 私たちが溜息のうちに
費す呼吸は悉く 死後の宝物なのだ、
唯、一点だけが汝から逃れ出る、汝の〈油〉が
静かに汝の炎と共に尽きて、両方共が絶えるのだ、
しかし私が外に出ている時はいつでも 両方共中におり
汝が終りになる所で 私は始まるのだ。

〔マルコによる福音書〕第十三章三十五章⁽⁵⁾

だからあなた方は目を覚ましているのですよ、いつ家の
主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴く頃か、
朝になってからか、あなた方には分からないからです。

〔M・四一〇—一一〕

訳注

(1) Horror 闇に対する魂の自然な反応。ヴォーンの散文

『オリヴ山』〔M・一六九・一一六〕の「夜は思想の母だ
とは或る精神の所見である。で、私は付け加えたいが、そ
ういう思想は星々なのであり、闇と闘う魂のきらめきであ
り稲光なのだ。魂におけるこういう嫌悪感dislikeは激しいものだ
が、光の家から降りてきたので魂は、相反する原理を嫌う
のだ」を参照〔R・A・五四三〕。

(2) stars nod, and sleepe G・ハーバート「神性」*Divin-
ity* 四行詩七連二八行の詩、W i L・四六八—七二」の
一行目「恐れfearのせいで星々は眠り頷く筈だった」と比較
〔同右〕。

(3) spin a fine thread 「星座」*小考* (七) 22」の一三一—
四行目「沈黙と光と不眠がそなたには／伴い、〈糸口〉を
巻き戻してゆく」と比較〔同右〕。

(4) 二行からの三行、Thy light, is Charity.. still on wing
G・ハーバートの「星」*The Starre* 四行詩八連計三二行
の詩、W i L・二六七—七〇」の一七一—一八行目「光と動
きと／熱の三幅対」と比較〔同右〕。

(5) 欽定訳の二箇所「あなた方」*ye*が*you*になっている
〔F・一五八〕。

十音節詩行がA A B B C C…と押韻してゆく二行連句二
六行の作品。「再生」*小考* (三) に始まったこの詩集の九

番目に、「英国教会」「小考（四）」と「人間の墮落と回復」
「小考（五）」に挟まれていて、この詩集の方向を照らし出す趣である。ローソクの燃えてゆくのを凝視して的確な観察をしながらの瞑想が如何にもヴォーンらしい表現で展開される。

「灯火」^{ランツ}とは、暗い悪霊「魔」から護ってくれる光「神」の存在を、そこから、知性、霊の再生を助ける魂、精神の案内役、希望、などの象徴となる「dev・二九〇」。

この作品から更に七番目に、「灯火」に呼応するような、作者自らに呼びかける詩が現れる。それは同時に、神からの召命のようなものとも作者に思えたのではあるまいか。そこから九番目に、この「呼び掛け」にやはり〈木霊〉するような、祈りを己に奨励する作品が来る。その二篇を続けてみてみよう。

呼び掛け The Call

来たれ我が心！ 来たれ我が頭！

溜息をつき 涙ながらに！

今こそだ、君がこうして死んでしまってから

およそ二十年経ったのだから、
目覚めよ、目覚めよ、
憐れみを幾らか
自らにかけよう——

目覚めて呻くことも泣き嘆くことも決してしない者は
眠っている故に判決を下されるのだ。

2

理解するだけでなく認めよう 君の悲しい状態を、
どれ程多くの砂が⁽¹⁾

我らから離れていったか、我々がのんびり

手を拱いている間に、

どれ程多くの夜が

昼が 年月が

音もなくこっそり飛び去って

いったことか 我らの耳を掠めて、

何と不正にも我らは自らをしまい込んできたことか

我らの太陽が悉く〈雲〉の中に沈んでしまっているのに？

それでも来たれ、それらを全て丹念に調べよう

そして我らが通り過ぎる時

どのような罪が毎分毎分降りかかるのか

砂時計で測り記録しよう、

それから目方を量り査定しよう

それらの重たい〈状態〉を

君が

その砂時計を涙で一杯にするまで⁽³⁾

そうなれば、我らは安全になり、気持ちよくなり、

あの〈反芻〉する動物たちは 清潔になったことになる。⁽⁴⁾

〔M・四一六〕

訳注

(1) Some twenty years 「この、二十年、に控え目な説明が可能だろうか。理性、善悪の識別力が始まるのは七歳頃とするのは宗教的な作家には珍しくない。弟ウィリアムの亡くなった一六四八年に二七歳だったこの詩人は、幼年期は無垢だと見做し、その後およそ二十年のんびり生きる時間が続くと考えているらしい。弟の死の年が、この詩人の発心 (conversion) の年になり、そつだ」〔H・一〇八〕。

この詩は一六四九年の作だろう〔M・七三一〕。

(2) How many sands / Have left us 砂時計の流動する砂は

人生の過ぎ行きを表すごく一般的な心象だった。例えばペーコンの『学問の発達』*Advancement of Learning*

(1605) II, Dedication, para.15 「そういう事柄は数代のうちには可能なものがあるう、一人の人間の生涯の砂時計のうちでは出来なくても」〔RA・五四七〕。

(3) The glasse with teares you fill 悔悛の印として〔同右〕。

(4) Those beasts were cleane, that chew'd the Cud 「ラズ記」11・3 「ひづめが分かれた偶蹄の、しかも反芻するものがあなた方の食べてよい生き物だ」、及び「申命記」14・6 「同じ主旨」参照〔同右〕。

朝の見張り The Morning-watch ⁽¹⁾

おお〈喜ばしい〉！限りなき爽やかさ！何という花々と

栄光の新芽と共に、我が魂は噴き出し、芽吹くことか！

夜と〈休息〉の

時間を長々かけて

眠りの静かな帷と

〈雲〉を突き抜けて

この〈露〉は私の〈胸〉に落ちてきた、⁽³⁾

おお何とそれは〈血を生み〉⁽⁴⁾

〈活気づける〉ことか 我が大地をすつかり！ 聞こう！

どのような〈輪〉をなし

〈讃えながら〉〈巡回して〉その生命溢れる世界は

目覚め 歌うことか、

立ち昇る風また風が

落下する泉、泉が⁽⁵⁾

小鳥たちが、獣たちが、あらゆるものが

彼をそれぞれの本性で讃えるのだ。

こうして全てが渦巻き運ばれてゆく

神聖な〈讃歌〉に囲まれ〈秩序〉立って、〈あの〉自然の

偉大な〈諧調〉と〈響和〉のうちに。祈りは⁽⁶⁾

調子の合った世界、

精神の声、

そして声となった喜びで

その〈木霊〉は天国の祝福なのだ。⁽⁷⁾

おお私に祈「昇」らせて下さい⁽⁸⁾

私が横たわる時に！ その敬虔な魂は 夜は

雲のかかった星のようになり その光線は光を

〈雲〉のようなものの下に

放つと言われているが

それでも上の方にあつて

輝き、動くのだ

あの神祕に充ちた覆いの彼方で。

それで我が〈寝台〉

あの〈幕を張った〉墓に、眠りを灰のように⁽⁹⁾

私の灯火と生命が隠しているが、その両方が汝の中に留ま

っている。

[M・四二四―二五]

訳注

(1) 「出エジプト記」14・24では、主が火と雲の柱からエジ

プト軍を見降して攪乱したのは、朝の見張りの頃^{morning}、the

morning-watch²である。夜の最後の三時間、「三時から六

時」ということになろう(OED watch sb4)。

ヴォーンはこういう慣用を念頭に置いたようで、「見張

り」を、日々の祈りとか宗教儀式の意味で用いていると思

われる。彼は祈禱の散文作品『オリーヴ山』を、この詩の

詩句や意味に相応する多くを含む「朝禱のための説論」で

始めている。

ペテットは「長い行と短い行のそれぞれの固りが模様を成す形式のようだ」と述べる「P・一二六」が、それは九部分から成ることになり、この数字の九が、創造の調和というヴォーンの主題を示している。天使の九階級と天体の九層があった。ミルトンの「キリスト降誕の朝に」の「讃歌」第一——四詩節を見よ「ここでは、荘厳な合唱をし立琴を奏している天使たちの交響楽に全球層が九重の諧調音で協調せよと呼びかけられ、神聖な声楽が我らをうつつと空想させてくれれば時は後戻りして黄金の時がもたらされるだろうとある」。長い行と短い行の交互によって形成される十字型も重要な意味がありそうだ「RA・五五二」。

(2) G・ハーバートの「聖書」—「The Holy Scriptures」I「ソネット、W i l l・二〇七—一〇」の一行目「おお〈書物〉！限りなき爽やかさ！」と比較「RA・五五二」。

ヴォーンはハーバートの句とその文脈も使って「自然の書物」にはその含んでいる神聖な教訓の故に聖書との共通点があると示唆しているのだ「P・一二八」。

(3) This Dew fell on my Breast 「オリーウ山」【M・一四五—二四—二五】の「私の心を御身の聖霊の露で清めて柔軟にして欲しい」と比較「RA・五五二」。

(4) O how... my Earth 「この二行では、血を生んだ活力ある精神と血液の循環運動が共にこの詩人と他の被造物の世界が夜明け時に新たな生命を吹き込まれることを示唆して

いる」Joan Bennettの評言「RA・五五二」。

(5) falling springs G・ハーバート「摂理」“Providence”四行詩三八連計15行の詩、W i l l・四一五—二七」の六一行目「泉がああ落下を、風がああ打撃を利用して」と比較「M・七三四」。

(6) Prayer is / The world in tune G・ハーバート「祈り」—“Prayer”I「ソネット、W i l l・一七六—八一」の八行目「あらゆる物が聴き恐れる一種の調子」と比較「同右」。

(7) Whose Echo is heavns blisse この意味は、天国の祝福は祈りの「声に出した喜び」の「木霊」だということのようだ。木霊が元の音の反響であるように、これは天国の祝福を祈りの反響だとして祈りに非常に高い地位を与えるのだ。しかしヴォーンは、神話のエコー（オウイデウス『変身譚』Ⅲ）を念頭に置いて、少々異なった意味を意図していたかも知れない「RA・五五三」。

(8) climb ペテットの示唆「(三)と「イサクの結婚」【小考(四) 3】の四四行目「devoutly climb」は「pray」の意味を担っている「P・一二三」【P・一七七】。

(9) Like ashes 「灰」亡骸「ashesはこの詩集ではここ以外にも、「探索」【小考(三) 27】の一七行目「灰の山があったが…火花は寝台なので」／「記八・時がある日私の傍らを過ぎていった」【小考(九) 20】の三七行目「眠れ幸せな亡骸よ！(祝福された眠りを)」／「祝祭」【次

号後出」の六行目「塵と灰を舞い上がらせんとして」と出てくる。

十音節詩行が十行、六音節が四行、四音節が一九行の計三三行から成り、押韻構成は十音節行二行が率いる八行はA B A C D D C Bの型、同じく七行（最初から三番目のものはA B C D D B Aの型で、以上を二行連句で締め括る。「朝の見張り」には対として〈夕べの見張り〉は必須であろう。ヴォーンの均衡感覚が揺らぐことはない。「夕べの見張り」の副題は、「朝の見張り」との対話でもあろう。

夕べの見張り The Evening-watch ⁽¹⁾

ある対話

肉体

さらば！ 私は眠りに就く、でも

明けの明星⁽²⁾が昇る時は 再び目覚めよう。

魂

そうなさい、安らかに眠るがいい、そして君が

数えられない程の塵となる時 この体格の全てが

ほんの僅かなものとなる時、そして君が今幾つかの部分に見出すものが名称を欲しがらるなら

彼の平穩は君と共にありますように、そうすれば一塵⁽³⁾彼の書物に書き込まれるだろう、彼は人間の信頼を決して裏切らない！

肉体

アーメン！だが聞いてくれ、我ら二人が迷わない間に
昼間になるまでどのくらいの時間だと思おうか？

魂

ああ！いいんだよ、君は弱いし眠いのだ。天国は

徹底した見張り人で、計算もせずに巻き上げるのだ

あらゆる時代をすっかり、この〈円周〉を正確に描く人⁽⁴⁾

彼がそれを満たすよ、〈毎日〉が毎時間が〈目晦まし〉⁽⁵⁾

なのだ

それでも、これは君が持つてゆけよ、時の最後の喘ぎは
君の最初の呼吸であり、人間の永遠の〈最盛期〉⁽⁶⁾なのだ。

[M・四二五]

訳注

(1) ヴォーンが見せた、肉体と魂との討論には、この作品以

外にも既に「死 対話」「小考(三) 21—22」と「復活と不滅」「小考(三) 22—24」がある。

肉体と魂との討論・論争には文学上の長い歴史がある。

Rosemary Woolf, *The English Religious Lyric in the Middle Ages* (1968), pp.89-102, and 326-30を参照 [R・A・五三三]。

(2) day-star キリストのこと、「パトロの手紙 二」1・19「夜が明け、明けの明星があなたの方の心の中に昇るまで暗い所に輝く灯火としてこの預言の言葉に留意していて下さい」[R・A・五五三]。

(3) Then may.. nans trust 王党派を支持したため迫害された英国の詩人 Henry King [1592-1669] の *Exequy* 「葬儀」69—76を参照 [R・A・五五三]。

(4) who drew this Circle even 「イザヤ書」40・22「主は大を覆う円周の座に着かれる」[同右]。

(5) *Blinds* 装い、我々から神の本当の目的を暈すもの (*OED* blind sb6)。「自分の時間を、月ごと週ごと一時間ごと一分ごとへと切り刻んでゆく、多くの差異のある日々複数の複数性に欺かれまいようにしよう…」[「オリーブ山」M・一八八・二—四]を参照 [同右]。

(6) *eternal Prime* 逆説であり、おそらく地口。「Prime」は、力が衰え始めないうちの、最大の活力のある期間を指す。それはまた、教会の聖務日課の時禱 (canonical hour) も

指す。一日の最初の祈りが「朝課」'matin' [同右]。

形態から分るとおり八音節と十音節の詩行が A A B C B C D D E E F F G G H H と押韻する一六行詩。

次に、弟ウィリアムを追悼する無標題の作品 [「記四」沈黙と日々の隠密よ！]「小考(九)」を置いてから、神を祝福しようと呼ぶ作品が来る。八行詩三連から成る二四行で、A A A B B B C C の型の押韻、音節数は一行目から順に 10 4 4 10 4 4 6 6 で、詩の形が示すとおりである。

礼拝 Church Service

《調和》の《神》と《愛》に祝福あれ！

上方にいます《神》様！

そして神聖な鳩！⁽¹⁾

その《執り成し下さる》精霊の呻きが

落ち着きなく嘆きの声を挙げます

塵と石のために

あらゆる所の塵のために

唯、堅い石のような心の中は別にして。

2

おおこの御身の〈魂〉の〈聖歌隊〉に私が置く有様とい

つたら

(御身の手に支えられて)

一山の砂を!

それを忙(せわ)しい物思(おも)いは(風のよう)に) すっかりばら撒いて

飛ばすことでしょう

唯 御身の力のせい、

御身の手だけが飼(か)い馴(な)らすのです

あの突風を、そして編(む)むのです私の骨組を、

3

それで石と塵の両方と 私の全ては

一緒になって同意して

御身に呼びかけるのです

だからこの〈音楽〉の中に御身の〈殉教者〉の血によって

封印され、良い贈物に

されたのです、おお〈神〉様!

これら石の〈反響〉が

——私の溜息、と 呻きの数々が。⁽³⁾

[M・四二六—二七]

訳注

(1) ここのからの三行 And holy.. restless mones 「ローマ人

への手紙」8・26 「同様に精霊も私たちの病弱を助けて下さる。私たちはどう祈るべきかを知らないが、精霊自らが

言葉に表せない呻きで執り成し下さるから」[M・七三四]。

(2) A heap of sand 「混乱」[小考(八) 49]の一行目、

「粉々に崩れたこの塵を…その堆積は…取るに足りない…」

と比較「RA・五五四」。

(3) sighs, and groans G・ハーバートに「溜息と呻き」

Sighs and Groans「六行詩五連計三〇行の詩、WIL・二

九七—三〇〇」がある。これら「苦痛を示す言葉にならない

音」は「ローマ人への手紙」8・22「被造物が全て今日

まで共に呻き生みの苦しみを味っていることを我々は知っている」を想起させる「WIL・二九八」。

この作品から九番目に、縁組み、好敵手、片割れ、似た者同志、などの意を内包した、協定、契約の意味の標題作が現れる。

協約 The Match⁽¹⁾

親愛なる友よ！⁽²⁾ その神聖な常に生彩溢るる詩行は

多大な貢献を果してきました

多くの人々に、そして塞き止めたのです 私のを

いつも高まつたり弱まつたりする私の激しい荒ぶった血を

そうして和らげるのです

あなたを燃え上がらせたあの明るい火によって

ここで私は手を繋ぎ、私の頑固な心を突き入れます

あなたの〈行為〉⁽³⁾に、

そこでは如何なる〈義務〉も果されないことはない

それでこの先 若さか愚かさかのさばって⁽⁴⁾

邪魔しようとするなら

ここで私はこの有害な技芸^{ウエアー}を放棄します。

ii

受け容れて下さい、恐れ多くも〈主〉よ、この貧しい〈寄進〉⁽⁵⁾を

確かに貧しいですが

それでも御身の〈慈愛〉でもっと豊かになります。

おお御身！ 私の魂の破滅を望まず⁽⁶⁾

私に生命を与えて

あらゆる内部の格闘から救って下されるとは！

二つの〈生命〉を私は御身から受け取ります、⁽⁷⁾ 我が慈悲深

い〈主〉よ、

両方共御身には高くつくものを、

一つを使つて私はここで御身の〈借家人〉になります

もう一方の、真物の生命は、来世でのものです

尽きることがないので、

おお私にやはり留意させて下さい、これの中であれを

御身にそれ故私の〈思想〉、〈言葉〉、〈行為〉を

私は確かに委ねます、

御身の意志は全て果されますが、私のではない。

私の家は巧く治めて、混乱は悉く閉め出して下さい

私の心とその中に収っていた

御身とを 解きほぐしてしまふようなものは、

〈主〉 イエス様！ 御身は尊い頭を下げられました⁽⁸⁾

一本の木の上で、

おお 殆ど同じことをして下さい、今 私に！

お聞き届けて 御身の僕を癒して下さい！〈主〉よ、す
っかり

打ちのめして下さい 私の中の煩惱を悉く、

誰が生命に御身に仕えて欲しいとだけ希うでしょうか
もはやこの塵を溢れさせて

私の眼を覆い尽したりせずに

御身の空に封印するか、ピンで留めて下さい。

そしてここで涙ながらに私が播くこの穀粒を

死んでいたり病んでいても、

御身の〈成長力〉によって新たに、生き生きと育て

下さご。

[M・四三四―三五]

訳注

- (1) Compact or bargain 「契約」「協定」の意味 [R・五
五九]。
- (2) George Herbert を指す。この詩集第二部の「序文」「小
考(四) 24」あの幸いなる人ジョージ・ハーバート氏で
[F・一九〇]。
- (3) Here... thy Dead G・ハーバート「恭順」“Obedience”
[五行詩九連計四五五行の詩 WIL・三七三―七八]の三

七―四三行目を参照。ハーバートは自らの「貧しい書き
物」を、自らの心と所有物の全てを、神に渡すための行為
だと言う。彼は同じことをしそうな人には誰にでも「その
手／と心とをこの〈行為〉に向けさせて」「彼の心をこれ
らの詩行に突き入れ」させようとする [F・同]。

- (4) And if hereafter...pois nous ware ハーバートの同じ詩一
一―一五行目「もしもこの先〈快樂〉が／自らに相応しい
と見做すものに／まるでそれが留保付きでとかそのような
言葉が流行で通用しているかのよう／異議を唱えて所有
を主張したりするなら／私はここでそのような口論好きを
御身の宝から締め出しましょう」を参照 [R・五五九]。
- (5) poor Oblation G・ハーバート「捧げ物」“An Offering”
[六行詩四連と変形の六行詩三連計四二行の詩 WIL・
五〇八―一一]の三九行目で自分の心を「貧しい寄進」と
も呼んでいる。この語は「英国国教会共通祈禱書」の中の
聖体拝領唱直前の祈りを反響させている [同右]。
- (6) that canst not wish my souls damnation 「共通祈禱書」
の「罪人の死を望まない…全能の〈神〉」参照 [同右]。
- (7) Two Lives I hold from thee G・ハーバート「知られざる
愛」“Love unknown” [七〇行の詩 WIL・四五二―五
八]の四―五行目「私が二つの生命のために受け取り、両
方共私の中に住んでいる…」参照 [同右]。
- (8) Lord Jesu... unto me G・ハーバート「熱望」“Long-

ing.「六行詩一四連計八四行の詩、W i l・五二二―一八」の三一―四行目「〈主〉イエス様、御身は臨終の頭を／その木に下げられました／おお今は私に／それ以上死んでくたさいますな」参照「RA・五六〇」。

(9) which here in tears I sow 「詩篇」126・5 「涙と共に種子を播く人は喜びの歌と共に刈り入れる」〔同右〕。

(10) Through thy Increase 「コリント人への手紙」一、3・7 「神は…成長力を与える」〔同右〕。

前半と後半に分けられているが、十音節行、四音節行、八音節行がこの順で反復され、A B B A C Cの型での押韻が繰り返されている。第一部の七三篇中、前からも後からも三七番目と、全く真中に配置された作品である。この事実は深く心に留めておきたい。

後半に入って十四番目に次の作品が来る。

自認 Admission

どのくらい疇高いのだろう 音もなく湧く涙は？⁽¹⁾ 罪が

勢いを増し 私の〈内臓〉が悉く

真鍮になり鉄になった時に、私の幹「株」が死んで⁽³⁾

私の力がすっかり嘆き悲しんだ時に、

その時になつたのだ この滴が〈大理石〉が汗をかき⁽⁴⁾〈岩々〉が涙を流すので

この地上で雨が私たちの窓々を敲き

御身の〈耳〉で音高く荒れ狂うように、

2

御身に安息はあり得ないだろう、まどろみもせず⁽⁵⁾

〈物乞い〉を寄せつけもしなかった

しかし私の眼が洪水にならないうちに眼の縁は⁽⁶⁾

一滴一滴に応えるのだった

〈愛〉の内臓よ！どのくらい低い割合で⁽⁷⁾

僅かな値段で、

御身は私たちを御身の門口で解放なさり

私たちの〈叫び〉を鎮められるのか？

3

私たちは御身の〈幼な児〉で、御身を吸い取る⁽⁸⁾、もし

御身が唯 隠れたりお顔を背けるなら、

御身が居られる所へはやはり赴けないのだから

私たちはその場所へ涙を送り出すのだ

涙のせいで御身は見つかる、それで私たちの罪が

御身を遠ざけたものの

それでもその不在のせいで御身の愛を得て私たちは

二重の報酬を勝ち取れるのだ。

4

おお だから私にお与え下さい 感謝に満ちた心を！心を⁽⁹⁾

私ではなく御身のに倣った心を

それなら御身のに倣ったものだから 私の心の全てとその

あらゆる部分は 御身のかしずけるのだ、

おお聞いて下さい！ とは言え 私の涙だけではなく

今は洪水を聞いて下さい、

涙と呻きの両方共を圧倒し去る洪水を、

我が〈救い主〉の血を。

[M・四五三]

訳注

(1) How shri are silent tears? ヴォーリンの詩集『アスクの
白鳥』所収の、チャールズ一世の次女エリザベスの夭逝を

悼んだ詩 [M・六三二] の一三—一四行目「音なき涙はしか

し声高い (と分る) し / 如何なる血とも同様瘡高い」及び、

「記一」私が誰を悼むのか知る方は「小考 (九) 2」の

四九行目「音もなく湧く涙は御身の玉座を貫けるのだ」と

その訳注 (8) — G・ハーバート「家族」の二〇行目「音

もなく湧く涙ほど瘡高いものは何か」— 参照 [M・七四

〇]。

(2) brass, and iron 「エレミア書」6・28 「彼らは皆嘆か

わしい謀叛人中で中傷して歩く、彼らは真鍮であり鉄だ」

[RA・五七一]。

(3) my stock lay dead G・ハーバート「恩寵」“Grace”四

行詩六連計二四行の詩、WIL・二二六—二〇]の一行目

「私の幹「株」は死んでいる」参照 [M・七四〇]。

(4) Marble sweats G・ハーバート「教会の床」“The

Church-floor”[二〇行の詩、WIL・二四三—四六]の一

五行目「しかし全ては大理石が泣く時浄められる」参照

[同右]。

(5) nor.. let thy Begger lie 「賞讃」[本稿後出]の五二行

目「物乞いを喜ばせて」及び、G・ハーバート「感謝の

念」“Gratefulness”[四行詩八連計三二行の詩、WIL・

四三五—三七]の三—四行目「御身の物乞いが〈業〉を振

るって御身に働きかける／様を見よ」と比較 [同右]。

(6) Bowels of Love 「『ハネの手紙』」、3・17 “his bowels

of compassion” [P A・五七一]。bowelsは「愛や同情心
などの宿る場所」

(7) at what low rate, /And slight a price G・ハーバート
「真珠」『The Pearl』一〇行詩四連計四〇行の詩、W i l・
三三〇一二七の三五行目「それでどのような割合と値段
で私は御身の愛を得るのか」と比較 [M・七四〇]。

(8) Wee are thy Infants, and suck thee G・ハーバート
「熱望」『Longing』六行詩一四連計八四行の詩、W i l・
五二一一一八の一四―一七行目「母親とは親切なもの、
御身がそうで／彼らに或る役割を／おさせになるから／彼
らの幼児が彼らに、それで幼児たちは御身を吸う」参照
[同右]。

(9) a thankful heart ハーバート「感謝の念」の二行目には
「感謝する心」『a grateful heart』と出づる。及びその最後
の二連を参照。「そういうわけで私は泣き叫び、再び泣き
叫ぶ／それで御身は平安ではいられない／私が御身への感
謝に満ちた心 (a thankful heart) を／抱くまでは」 「感謝
に満ちてはいない、それが私を楽しませる時は／あたかも
御身の恵に余備の日々があったかのように／しかしそのよ
うな心の 鼓動はおそらく御身への／賞讃となろう」 [同
右]。

八行詩四連が、例外なしに A B A B C D C D の型の押韻
構成で、音節数は A が 10、B が 6、C が 8、D が 4、と整
然とした詩型である。

〈自認〉の次に〈賞讃〉と続くのは、標題だけを見てい
ても興味津々たるこの詩集の構成が窺えよう。それは既に
先走って本「小考(八)」で、ある方向を示唆したが、結論
で詳述したい。

賞讃 Praise⁽¹⁾

〈慰め〉の王！ 生命⁽²⁾の王！

御身は私を元気づけて下さった、
恐ろしいことや疑わしいことが夥しい時
御身は私を励まして下さった！

私の〈胸〉の一隅だけでなく

全体を御身は満たして下さい

私の安息を破る或る物思
それを御身は消して下さる、

という訳で 力の限り⁽³⁾

私は御身を賞讃するのです

そして御身が道筋と距離⁽⁴⁾をお与え下さるので

私は御身を持ち上げるのです、

昼と夜、一日に一度ならず⁽⁵⁾

私は御身を祝福します

そして魂の装いも新たに

私は御身を飾り立てましょう、

一年に一瞬といわず

私は御身を心に掛けましょう

この地上で 私の紋章、腕輪⁽⁶⁾として

私は御身を結びつけましょう、

御言葉に浴していると まるで天国に

いるみたいに私は安らげますし

御身の約束がそこで遂に果されると

私には大いなる喜びとなります。

だから御身のお仰せは私を生涯

樂しませて下さるし

御身の血まみれの傷と奮闘は

私を樂にして下さるのです、

御身の呻きで私は日々の

呼吸を測り

御身の死の中に隠れている私の生命を

私は宝物とするのです。

それでも御身は 心のことに

あらゆる完璧な充実ぶりに

思い及ばれないし、

塵^{ダスト}と沈滞^{グレスス}から

近づくことを些かも

お認めになれないのです、

しかし御身のものと言うべき

(御身の輝かしい〈本質〉と

同じものではないもの)

私たちの汚れた、〈土〉の両掌は

御身の〈思い〉のままに

賞讃と〈芳しい敬意〉をもたらすのです、

もしそうなら 畏るべき〈主〉よ、

御身の哀れまれる悲運な者が

御身に食事を乞いにやって来る時には

持って来ます 花を一本とか

(彼の出来る範囲の)

何かそのような貧しい〈捧げ物〉を、

御身が やって来る

物乞いを喜ばせて

その胸を満たしておやりになった時には

彼に (貧しくはあっても)

御身の戸口で撒き散らさせてちりちり下ろさ

あの一本の貧しい〈木の花^{フロックスム}〉を。

[M・四五四―五五]

訳注

(1) 前半の、七音節と四音節の詩行が A B A B と交互に押韻する四行詩八連の韻律は、G・ハーバート「賞讃」二『Praise』II「同じ形式の七連、W i L・五〇六一―八」を参照 [M・七四〇]。

後半の、四音節と五音節の詩行が A A B C C B と押韻する六行詩四連の韻律は、ハーバート「捧げ物」『An Offering』。「賞讃」二直後の、六行詩四連に変形六行詩三連から成る詩、W i L・五〇八一―一二」の後半と比較 [R A・五七一]。

(2) King of Comforts! King of life! ハーバート「賞讃」二の一行目「栄光」の王、〈平和〉の王」King of Glorie, King of Peace」と比較 [R A・五七二]。

(3) Wherefore with my utmost strength/ will praise thee
ハーバート「賞讃」二の九―一〇行目は、'strength' → 'art, praise' → 'sing'。

(4) line, and length=scope and opportunity [R A・五七二]。

(5) Day, and night, not once a day ハーバート「賞讃」二の十七行目は、'Sew'n whole dayes, not one in seven'。

(6) bracelet 恋人どうしの愛の印として与えられるもの [R A・五七二]。

この作品の後五番目に、復活祭の日やそれへの讃歌、そして聖餐式への想いを詠ってから「詩篇」への改作？の挑戦が出てくる。

詩篇 一一一 Psalm 121

あの明るい楽しい丘陵⁽¹⁾へと

私の安寧と込み上げる笑いの源へと

眼を上げて、私はあの方を思い焦がれるのです

(姿を見られずに) 天と地を満たして下さるので。

彼だけが私の助け手、私の希望です

私が断じてよろめかないための、

彼の注意深い〈眼〉はいつも開いていて

愛する者を保護して下さる。

この栄光に輝く〈神〉が私の唯一の支えで

彼こそが私の〈太陽〉、そして陰、

夜分の冷気も昼間の熱も

私に侵入したりはしない。

彼は私を敵の憎しみから守り

あらゆる策略を抑えて

盾になって下さる(そうとは思わずに)

私の魂そのものの。

異国で、〈群象〉の直中^{なか}で

はたまた私の扉の中で

彼は私の〈柱〉、私の〈雲〉⁽³⁾

今も、そして未来永劫^{とこしえ}。

〔M・四五八―五九〕

訳注

(1) bright and gladsome ヴォーンが付加したもの〔R A・五七四〕。

(2) who fits (Unseen) 欽定訳は 'which made'. 「記六」私は先日歩いて「小考(九) 13」の五四行目「目には見えないがあらゆるものの中におられる／御身から」参照〔M・七四一〕。

(3) my Pillar, and my Cloud ヴォーンが付加したもの。〔「記三」我が生涯の喜びよ!〕「小考(九) 5」の二五行

目「柱の火」、及び「出エジプト記」13・21「昼は雲の柱で……夜は火の柱で……」参照「RA・五七四」。

八音節と六音節の詩行がA B A Bの型で押韻する四行詩五連計二〇行の作品。欽定訳版の「詩篇」一二二を、なるべく逐語訳で示してみよう。

- 1 私は目を上げて丘陵を仰ぐ、私の助けが 来てくれる所を。
- 2 私の助けは来る、天と地を造られた〈主〉の許から。
- 3 彼が汝の足をよろめかないようにして下さるだろう、汝を守って下さる方はまどろんだりしない。
- 4 見よ、イスラエルを見守る方はまどろまず、眠りもしない。
- 5 〈主〉は汝を見守る方、〈主〉は汝を覆う陰となり、汝の右手にいます。
- 6 太陽は昼、月は夜、汝を撃つたりはなさらない。
- 7 〈主〉はあらゆる災いから汝を護り、〈主〉は汝の魂を護って下さる。
- 8 汝が出てゆくのも帰ってくるのも〈主〉が護って下さる

るように、今からずっと、そして未来永劫とこしえにさえ。

ヴォーンのは紛れもない文芸作品に、詩になっている。欽定訳版がヴォーンを触発するとういう作品になる、ヴォーンはそういう資質の詩人だったということを示して興味尽きない材料であろう。

「詩篇」は言うまでもないが、五巻百五十篇より成る旧約聖書中の詩歌集で、知恵文学と言われるものの問題の殆ど全てを包含しているとみられている。「一二二」は「一二〇」から「一三四」へかけての都詣での歌群の一篇で、年に三度義務づけられていたというエルサレム神殿参詣の折りの巡礼歌に属する（小嶋潤『聖書小事典』教養文庫、一二〇頁）。

ハーバートにも、「詩篇二三」を作り替えてみせた詩「Wil・五九二―九六」があるが、ヴォーンは更に二篇同じ試みをして第二部に収録した。ここで一緒にそれらを出現順にみておこう。共に力作であるが、その三篇についての考察は次の機会にして、実態だけを示したい。

起き上つて、おお我が魂よ、〈主〉を讃えよ。おお〈神〉

我が〈神〉、何という大いなる、何と誠に大いなる方

御身は！

名譽と威厳はその住み処を ①

御身と共にし、その額に王冠となつている。

御身は自ら光を纏つておられる 長く裾引く衣として

高々と栄光に輝く天を力強い手で ②

幕のように張り拡げられます この地球の周りに

〈空気〉と〈海〉と〈陸地〉に。

明るく輝く御身の〈天の宮〉の梁は深々と ③

水の中に渡されるが 誰の眼にも見つからない、

雲が御自分の馬車、行き辿る道筋は

疾風の翼。

天上の楽しい伝言を ④

聖なる魂に急ぎ送り 御身を

愛し欲して苛々しながらいそいそ働く〈御使い〉は 各々

燃え立つ火となつて御もとに仕える召使いだ。

御身の腕はいつまでも動けないまま確固たる ⑤

大地を据えつけ根づかせ、それを深淵で

覆うように^②に隠されたのだ、洪水を山の ⑥

急坂に溢れさせて。

御身の叱責で洪水は逃げてゆき 聞き慣れた〈主〉の

雷鳴の聲で素早く引き下つた、 ⑦

あるものは山々の上を秘密の道を通つて過ぎ去り^③

あるものは下方へと元の居場所に戻つた。 ⑧

御身は洪水に境界を設けられた、境界を ⑨

(砂にすぎないが) 全ての海を収め抑えるための。

そこであらゆる彼らの憤激、泡、恐ろしい音は

どうしてもぐつたりし徐々に減つてゆく。

配慮でこういう制限をなさりながら 御身の豊かな愛は

大地に穴を穿ち、更に細い流れを噴出させる、

それは丘陵から谷間へと走り、高めてゆく、^⑩

丘や谷の楽しみと価値を。

それで野という野の獣は飲み物を与えられ^⑪

野生の驢馬は冷たい水を飲み

水のほとりの木々の枝に 鳥は^⑫

住み着き歌を歌う。

御身は上の天空の〈泉^⑤〉から、あの〈天国〉の大瓶^⑥を

備えた雨の〈天の宮〉から、^⑬

区分けした丘陵へ水を注ぎ、それでその罅割れは閉ざされ
る

高みからの驟雨に癒されて。

家畜には食^はむ草を、人間には役立つ香草を

御身は育てられる、それらが（御身に祝福されて）大

地に^⑭

もたらすのだ、葡萄酒を、油を、パンを、全ては注ぎ込む
ものなのだ

人間の心に 力と湧き立つ喜びを。^⑮

御身は木々に緑を与える、レバノンの^⑯

あの杉にさえ、その繁った大枝には

鳥たちが巢をかけるが、唯 〈コウノトリ〉は棲み処に

縦の木を選ぶ。^⑰

野生の山羊には高い丘陵が囲いになり

岩場は〈岩狸^⑦〉に 退いて憩う場所となる、^⑱

その頭上には冷たい〈月〉が馴染みの進路を確保し

〈太陽〉が自らの競争を繰り抜ける。^⑲

御身が闇を作られると 夜が来る、

その濃い陰と静寂の中を各々野生の動物は^⑳

這い進んで 食物を求めて掴み、鼻と眼で

熱心に探し回り 狩りをする。

〈獅子〉は出産が長びくのに苛立って^㉑

森の隠れ処で吠え、御身に

食事を求めるが、餌食を定められ

毎週食べさせてもらえるからだ。

これが過ぎると〈太陽〉が地上に輝き、彼らは

それぞれの時に退く、〈人間〉は戸外へ ②②—②③

仕事に出かけ、一日の終りには

荷を負いながら家に帰る。

おお〈主〉よ、我が〈神〉、如何に夥しく如何に稀なもの
であることか ②④

御身の大きいなる御業は！ 知恵を絞って

それらを全て成し遂げられた、それでこれが地球となり

草の葉悉くに我らが踏んだのだと断言させる。

深くて広い海も同様で ②⑤

大小共々 這い回る生き物は数知れない、

そこを船が行き交う、すると水夫たちの畏れるもの⁽⁸⁾ ②⑥

端正な巨大な〈鯨⁹〉だ。

彼らは全て御身に仕える、御身がしかるべき時に食べ物

下さるようと。御身が賜う物を彼らは受け取り

御手が^{みて}気前よく^み扱げられれば必要な時に助けられるので

彼らは豊富な食事に恵まれる。 ②⑦—②⑧

お顔を（あらゆるものを生み出されるのだ） ②⑨

隠されれば、彼らは衰弱して嘆き悲しみ、

息吹を取り上げられると彼らの活力は眠り

元の塵に戻ってゆく。

御身が御自分の息を送り込まれると彼らは生き返り ③⑩

凍った大地の死んだ面^{おもて}は新たにされる。

こうして御身は自らの栄光を世界に行き渡らせ

御身の御業^{みわざ}は真実となる。 ③①

御身の眼は大地を見、その舞台は悉く ③②

動かされ震え、丘陵は溶けて煙る、

御身が僅かに触れただけで。稲光と風は

御身の叱責に激怒して噴出する。

それ故御身が私に息吹をお与え下さる限り ③③

私は歌を歌って御身の大きいなる御名に

あの御身の賜物¹⁰を捧げ、私の死の日には

御身だけが私の喜びとなるでしょう。(34)

私は私の考えに 御身で風味を添え⁽¹¹⁾、御身の言葉から 35

真物の慰めを集めよう、しかし邪悪^{よこしま}に生きる者は

消え失せるように。おお我が魂よ、汝の〈主〉を讃えよ！

そうだ、汝は永遠^{とこね}にあの方^{かた}を讃えるのだ！

〔M・四九四—九六〕

訳注

(1) In thy..in fire この連はヴォーンの感受性の特色を表わしている。欽定訳の第四節「さまざまな風を御使いとし／燃える火を御もとに仕えさせる」のヴォーン訳である〔R A・六〇六〕。

(2) with a veil [="veil] ヴォーンはveilが好みの語。欽定訳第六節は「with a garment」〔衣(くるも)となつて〕〔同右〕。
(3) by secret ways ヴォーン^ウの付加したもの。‘secret’はこの詩集(第一部、第二部合わせて全部で)で二四回と複数形の名詞一回が使われる〔T1・一七三〕〔同右〕。

(4) though but sand 「反抗」〔小考(八) 58〕の一一—一二行目とその訳注参照〔M・七四八〕。

(5) upper Springs above 「森」〔小考(二) 49〕の四九、五

二行目「上から送られてきた流れ」「こういう上方の泉でなければ生命の木々は育めない」参照〔M・七四八〕。

(6) Heavys large bottles 「エブ記」38・37「誰が天にある瓶を支えられるのか」〔同右〕。

(7) Conies ≡ rabbits (現在の語は元来子供だけを指した)〔R A・六〇六〕。旧約聖書では「岩狸」シリアハイラックス(daman)だとされる。

(8) fear 恐れる対象。この語は、神祕の、超自然のもの、靈感‘the numinous’の意を伝える(OED fear sb5d)〔R A・同〕。

(9) Whale 欽定訳では「レビアタン」‘leviathan’。海に棲む巨大な怪物。鯨、海蛇と考えられ、悪の象徴とされる。この他に「ヨブ記」41・1。トマス・ホップスの政治・哲学論『リヴァイアサン』(Thomas Hobbes, *Leviathan*, 1651)では「富んだ者、努力者」。

(10) That gift of thine 「献辞」〔小考(三) 16〕「私に賜った御自身の贈物しか」(御身に差し上げるものは何もありません)‘But this thine own gift, given to me’参照〔M・七四八〕。

(11) He spice my thoughts with thee ‘spice’はヴォーン^ウの氣に入りの語で、欽定訳第三四節の「御身への私の思いが御心に叶うように」‘My meditation of him shall be sweet’の翻訳の際に導入された〔R A・六〇六〕。

十音節三行と六音節一行がA B A Bの型で押韻する二四連九六行の長篇で、全三五節（拙訳の下に丸で囲んだ数字はその各節辺りを示す）から成る欽定訳の「詩篇一〇四」のヴォーン版である。それから三一番目に次の作品が来る。

詩篇六五 Psalm 65

シオンの紛うかたなく栄光に輝く（神）様！ 御身に
賞讃が訪れます ひたすら謙虚に。①
肉なるものは全て御身に赴きます
御身に、おお 祈りをお聞き下さる方！②
しかし 罪深い言葉と業とはやはり抜がって
私の心と頭を圧倒します、③
背信が毎日 私を汚すのです
おお それを贖って下さい それをすっかり贖って！④

幸いですが彼は！御身に祝福された⑤
家で仕えるように選ばれる人は！
御身の聖なる（神殿）に住んで

喜びに満ち溢れる人が御身の美德を告げるのです！

（救い）の王！ 不思議な恐るべき

事柄によって（御身）の（正義）が人に

その義務を果たさせるのです。御身だけが⑥

世界の希望です、御身の他には何もありません。

流れのある海を漂う水夫たちは③

御身に依り しっかりと立って確かに平穏でいられます。⑦

御身はこの上なく荒れている時のどよめく波を鎮め、⑧

怒り狂う人々を穏やかにします。

御身の腕にして初めて山々を宥め、

その岩ばかりの頭を 今日 引き締めるのです。

最も遠く離れている人々は御身を知らず⑨

御身の大きいなる御業に驚嘆するのです。⑨

（宵）と（暁）の出で立つところには

（応答歌唱）で御身の（御名）が讃え歌われます。

御身は低い土地を訪れては

水を撒かれます 人々の息子たちのために、⑩

上方の川は肥沃な流れに

富み 土地を悉く豊かにします

そして御身の慈悲で補われて

種子播く者は自らのパンを準備します。

御身は土地のあらゆる畝を潤し ⑪

秘密の御手でその耕地を

定められます、すると御身の暖かな

開始の驟雨が(害にならないように抑えられて)

その耕土を軟らかくするが、そうこうするうち全ては見え

ないまま⁽⁴⁾

穀草の葉が生き生きと成長して緑になります。 ⑫

そういう年には御身の善行が王冠となり

御身の過ぎ行かれる径には悉く油が滴り落ち

荒野の原にも落ちます ⑬

御身は砂漠さえ祝福されるので

丘陵は跳ね上る誇りに満ちて

左右両側に新鮮な飾りを身につけます。

稔り豊かな羊の群がどの〈谷〉⁽⁵⁾にも満ち ⑭

波打つ〈小麦〉⁽⁵⁾が〈谷間〉⁽⁵⁾を覆います、

彼らは喜びの叫びを挙げ、声を合わせて歌います、

永遠なる〈王〉に栄光を！と。

[M・五三二—三三二]

訳注

(1) in all humility 欽定訳にはない、ヴォーンが付加したものの「RA・六三六」。

(2) O purge them 欽定訳もジュネーヴ版も直接法だが、ヴォーンは命令形「同右」。

(3) Salts 欽定訳にもジュネーヴ版にもない、ヴォーンの付加「同右」。

(4) while all unseen: alive and green ヴォーン特有の付加。「記六」私は先日歩いて「小考(九) 11」の一九—二〇行目「緑も瑞々しく／彼は私たちに見られることもなく生きていた」参照「M・七五一」「RA・六三六」。

(5) putting = waving, rippling 「からから音立てて」「波紋を描いて」流れる「F・三三七」。「put」は「金糸銀糸で刺繍する」「RA同」。

欽定訳十三節(拙訳の下部丸囲み数字でおおよその辺りを示した)の詩篇を、八音節の二行連句計四八行で、それも前後に二四行ずつに分けて、後半の最初の行(二五行目)だけは十音節にして、改作したものである。

ヴォーンが「詩篇」の中で何故この三篇に特別興味を抱

いたかも、彼の解明に繋がる疑問だが、今は、第一部の残る二篇に戻ろう。「詩篇一二一」から五番目の作品である。

巡礼の旅 The Pilgrimage

薄明が訪れ、空に星々が

現れる時 旅人たちは

過ぎ去った日々の出来事を要約する

こうして我らはそこで見て、こうしてここに、と。

その時 ヤコブのような小屋が或る場所にあり

(或る場所であってそれ以上ではないが、定められる)⁽¹⁾

そこで その日が運行を取り戻すまで

彼らは休息して 自らの家を夢みる。

それで この夜のために私はここでぐずぐず過しながら

ここかしこで ばたばたあまた飛び回るものの中で

やはり思い込むのだ 御身が姿を見せて下されば

私は身を起こして出かけられるのだがと。

私は憧れ、呻き、御身のために嘆き悲しむ

御身のために 私の言葉、私の涙は、どっと流れ出る

おお 私は目に見える所に居られさえしたら!

とそれだけを 私は〈茂み〉の中で書き記したのだった。

生れた森を奪われた〈小鳥たち〉⁽²⁾が

〈食べ物〉は良いものであっても

歌も歌わず、手に入る食事も好まず

家を思つて焦がれ泣くように、

私もまた悼み嘆き 首うなだれる、

御身は私に一杯与えて下さるもの

それでも私は更にもっと良いパンを探し求める、⁽³⁾

これでは人は生きてゆけないので。

おお だから私に食べさせて下さい! そして私は

まだ更に何日も幾晩もかけて〈考慮で〉きるのですから

私を、〈主〉よ、ずっとこの先も強くして下さい、

御身の〈山〉⁽⁴⁾へ旅してゆけるように。

「ヘブライ人への手紙」第十一章第十三節⁽⁵⁾
 そして彼らは、公けに表明したのです、彼らは自分たちが
 地上では他所者であり巡礼の旅人であると。

〔M・四六四―六五〕

訳注

- (1) A place... is set down 「創世記」28・11で、ヤコブは「ある場所」に出くわした、とだけ言われる。そこで一晩過して天に届いている梯子の夢をみた〔F・二二八〕。
- (2) As Birds... do pine この一連四行、ヴォーンの後の詩集『甦ったタレイア』所収のボエティウス (Ancius Manlius Severinus Boethius, c.480-524AD) の頌のヴォーンの英訳〔M・六五〇、二二―二二〕「森の高い枝で甘美に啼いている鳥を捕えて籠に入れたら、どれ程優しく世話をしてその鳥の好みの飲食物を十分与えても、その狭い牢獄から影深い木立ちをその鳥が垣間みたら、与えられた食物を嫌い、森を悲し気に憧れ思うのだ、森だけを恋うのだ」参照〔M・七四一〕。
- (3) Yet look I..cannot live 「マタイによる福音書」4・4「人はパンのみにて生きるものではない。神の口から出る言葉の一つ一つで生きる」参照〔RA・五七九〕。
- (4) thy Mount 「列王記」上・19・8「エリアは…食べ物に

カづけられて…四〇日四〇夜歩き続けて、遂に神の山ホレブに着いた」参照〔M・七四二〕。

(5) 欽定訳とジュネー版「ヴォーンが主に使ったとみられる」のこの箇所は同一である。但し、最初の「彼ら」はヴォーンが挿入したものの〔F・二二九〕。

冒頭一行目だけが九音節であとは全て八音節の詩行がA B A Bの型で押韻する四行詩七連計二八行の作品で、バイブルの一章句が付いている。

この詩から五番目の(またしても!?)一篇が、巡礼者から羊飼へ思いを及ぼした次の力作である。この作品で、第一部の七三篇は全て拙訳を一まず終わることになる。

羊飼いたち The Shepherds⁽¹⁾

爽やかに 無害に生きる人々!⁽²⁾ (その神聖な余暇に伴うのが〈無垢〉と楽しみだ)

彼らをあの牧場から牧場へ、澄み切った泉へと導くのは
 〈族長たち〉〈聖人がた〉そして〈王たち〉⁽³⁾ だった、
 どうしてそうなったのか 真夜中に⁽⁴⁾

君たちだけが真物の光を見たなんて、

パレスチナはぐっすり眠りこけていて〈昼間〉の

ことなど思いみることさえない有様だったのに。

それはあの最初の祝福された田舎者たちが

その約束を受け入れた時 あの平原の

巡礼者だったからなのか？ そのために今

そこでそれは初めて君には示されたのだが。

成程彼は、彼らが踏んでゆくあの〈塵〉を愛してはいる、

下界のここで自分に役立ってくれて

それ故思い出のために そのでの彼の愛を

初めて顕あろわに示してくれそうだからだが

しかし惨めなセイレムは かつて彼が愛していたのに今や

知らないに違いない、如何なる声も光景も、

その高々と誇りに充ちていた堂々たる〈大建築群グランドビル〉も

今や弱り果てて死んでしまい

その上をベツレヘムの粗末な〈小屋〉が踏みつけている

その地の〈見者たち〉が皆 眠っている間、

その地の〈シーダー〉、樅、切り出された石や黄金は全て

倒されていきながら汚染されてしまい
あのかつては神聖だった邸宅群も今では

空虚な見かけだけのものとなり

このせいで〈御使い〉は葦と藁を訪れる羽目になった

それでもそこを羊飼いたちは見詰めている、

そして〈神〉御自身の住まいは（無しではすませない）

ありふれた〈飼ラい葉ツ桶ケ〉¹⁰ということになる

高価な誇らしいものもお蚕ぐるみの贅沢も

そのような薄っぺらな〈小部屋〉にはない、

辺りを揺るがす風や嵐が彼らの〈小屋〉を吹きまくっても

中で陰謀など育まれる筈もなく

ただ〈満足〉と愛と慎ましい喜びだけが

そこでは物音一つ立てず住みついていたし

おそらく翌日のための何か無害な〈心遣い〉が

それらの住まいの胸奥で働いていた、

たとえば飼っている羊をどこへどのような物静かな隅へ

どのような泉へ 木陰へ 導けばよいか探すような、

しかしそれが全てだった、そして今や楽しげな心配りを

しながら 彼らはその町へと準備を整え

引き連れている羊を後に残し 忙しそうに語り合いながら

皆はベツレヘムへ歩いて行く

魂の大なる羊飼いに会おうために、彼なら

はぐれものを全て家へ連れ帰れる筈だと
そこで今や彼らは彼を見つけて教えたのだ

あの〈神〉の〈小羊〉が崇拜する前に

その全盛の日々を偉大な〈王たち〉や〈預言者たち〉⁽¹²⁾が

見たいと望みながらも見損ねたあの〈小羊〉だった。

彼らが目撃した最初の光は明るく華やかで

彼らの夜を昼に変えたが

彼らが⁽¹⁴⁾彼の中に見たこの後の光に較べて

彼らの日中は 暗くてぼんやりしていたのだった。

〔M・四七〇—七二〕

訳注

- (1) この詩は次の書物の中で、処女出産についての二節の後
に引用されている。A Brief Epistle to the Learned Manasseh
Ben Israel. In Answer to his. Dedicated to the Parliament
(1650), by E.S. (pp.23-5) 〔M・七四三〕。
- (2) livers 一六五五年版の'lives'〔F・二三八〕は「⁽¹⁾の語
を校訂したもので、韻律上の理由、及び、全く同じ意味で
『甦ったタレイア』所収の『引返』〔M・六六二〕の四行目
で使っているので〔M・七四三〕、〔RA・五八三〕も賛同。
- (3) Patriarchs, Saints, and Kings アブラハム、モーセ、ダ

ヴィデは皆、羊飼いだった〔RA・五八三〕。

(4) How happend...true light 「ルカによる福音書」2・8

—9「その地方には羊飼いたちが野宿をしながら夜通し羊
の群れの番をしていた。すると見よ…主の栄光が彼らの周
りを照らした」〔同右〕。

(5) Palestine パレスチナ王国、アジア南西部、地中海東岸
にあった古代王国、聖地ともいう、バイブルではカナン。

(6) Was it...the promise 「祝福された田舎の若者」とはア
ブラハムとロト（創世記）12。欽定訳一六四九年版では
「創世記」第十二章の頭注は「神はアブサロムを呼んで、
キリストの約束された者だと祝福した」〔RA・五八三〕。

(7) Salem エルサレムのこと〔F・二三八〕。「創世記」
14・18「セイレムのメルキゼデク王は…」〔RA・五八三〕。

(8) Bethlem エルサレム南方の町、イエスとダヴィデの生
誕地。

(9) Cedar... gold ソロモンの神殿建築に使用された材料、
『歴代誌上』2—4 参照〔RA・五八三〕。

(10) Rack = manger 〔F・一三三八〕。

(11) souls great shepherd 同じ表現が、コトンの讚美歌
の第二連 (Cotton's Hymn 'On Christmas-Day', st. ii, ed. Ber-
esford, 1923, p.104) に出づる。「羊飼いたちよ、立ち上
って、君たちの羊の群れを後に残して走るがよい／魂の大
いなる〈羊飼い〉は今やってきた」〔M・七四三〕。

(12) great Kings..wish'd...but miss'd 「詩篇」14・7 「どう
かイスラエルの救いがシオンから起こるように」及び「イ
ザヤ書」59・11 「私たちは正義を望んだがそれはなかった、
救いを求めたが私たちからは遠く去った」参照「RA・五
八三」。

(13) The first light 即ち「主の栄光」の輝き、「ルカによる
福音書」2・9 「同右」。

(14) in him 幼児キリストの中に「同右」。

十音節と六音節の詩行がAABB…と対で押韻してゆく
二行連句詩型の五四行の作品。

次に、ユダヤの民への期待が表明されている一篇をみて
みたい。

ユダヤの民 The Jews

そなたたちの解放者の
麗しい年がやってきて

そなたらの心を今麻痺させているあの長い間の
霜が溶けようとする時、ここで〈御使いがた⁽¹⁾〉が

これから人間に姿を見せて

親し気に〈樅〉と〈レダマの木〉の

下で話し合おうとする時、

聰明な〈鳩⁽²⁾〉が

これまでこうして多くの、多くの〈泉〉を

天上に保ち続けた挙句

今や両翼を上げて

降りてきて、水がどくどく流れて

乾いた塵と枯れた木々を育てる時、

おお その時こそ 私は

生きてあの〈オリーブの木〉が

しかるべき枝々を茂らせるのを見られそうだ！それらは今

各々の所に散らばって

しかも根も樹液もいまま朽ちてゆく、

農夫に棄て去られたま⁽³⁾。

そして確かにそれは遠くはない！

何故ならそなたらの速やかな醜い衰退は

明るい明けの明星⁽⁴⁾の先触れとなりながら

その星の発する癒しの光線が どこか

他所で輝きそうだと 悲しいことながら気付いたからだ
〈神〉が親切な時 そなたらは盲目で気難しかったのだ、

丁度そのようにあらゆる印をみせながら
私たちの満足もまた 今訪れる、
そしてここで衰え沈むあの同じ

〈太陽〉が それから幾時間も経たないうちに

再びそなたらの上に昇って見晴かし始めるだろう
往時の〈マムレ⁽⁶⁾〉の野と〈エシユコル⁽⁷⁾〉の谿の方を。

何故なら確かに彼は

世界を理解するためには一人〈息子⁽⁸⁾〉も

差し出す程 世界を愛したのだし

余りにも悼みと悲嘆に耐えられない精神のせいで

人間が墮落するのを見ていられずに 古くからの愛ゆえに
そなたらの暗い心からこの覆いを取り除こうとするのだ。

信仰は最初 地上でそなたらの中に留まった、

そなたらは貴重な選ばれた人種だった、

栄光に充ちた真実の〈神〉の〈腕〉が

初めてそなたらの岩⁽¹⁰⁾のだと明らかにされた。

そなたは最年長の子だった、そして

そなたの石の心が 愛を軽蔑した時

最年少者は、その時は〈異教徒〉でさえ、

歓迎されたので そなたの嫉妬が掻き立てられた。

こうして〈正義の父〉よ！ 御身は関わりを持つのだ、

〈野蕃な〉人々と。御身の贈り物は

代わる代わる折りよく行き渡り それで治すのだ

迷える〈息子⁽¹¹⁾〉を 新たに発見されたものによって。

[M・四九九―五〇〇]

訳注

(1) ハコから七行目まで When Angels: Beneath the Oke
and Juniper 「宗教」 「小考」 (二) 56―58 の初めの二連と
その諸注参照 [M・七四八] [F・二九一]。

(2) Dove = The Holy Spirit 「マタイによる福音書」 3・16
「神の霊が鳩のように御自分の上に降ってくるのを御覧に
なった」 [F・同]。

(3) イスラエルは枝々を〈主〉によって折られる緑のオリ
ヴの木「平和の象徴」であり「エレミア書」11・16「主
はあなたを美しくして良い実のなる緑のオリヴの木と呼ば

れた)その彼は「ヨハネによる福音書」15・1「私「イエスはまことの葡萄の木、私の父は農夫である」の農夫だ【F・二九二】。

(4) the bright morning-star = Christ 【ヨハネの黙示録】2・28、22・16参照【RA・六〇八】。

(5) Our fulness too is now come in ヴォーンの見解では、イングランドの精神状況は絶望状態なので彼はユダヤ人種の精神上の蘇生を待望する。ヴォーンはハーバートの興味深い長詩「教会闘士」『The Church Militant』【二七九行、Wil・六六四―八五】を頼みとしており、『甦ったタレイア』所収の「キリスト教徒の宗教に寄す」『To Christian Religion』【M・六七四―七五】の九―一四行目で言及している〔見者〕が、光輝くものの運行を観察して〈罪〉が成長してゆくのを見つけ、その運行は西方へだと予告してきた。昼間になると栄光に満ちた〈太陽〉が落ちついて輝くのだ【同右】。

(6) Mamre 「創世記」13・18「アブラムは…ヘブロンにあるマムレの檜の木の所に住み、主のための祭壇を築いた」〔同〕14・13、24／「同」18・1／「同」35・27。マムレはアモリ人で、次に出てくるエシユコルとアネルの兄弟でアブラムと同盟を結んでいた【同右】。

(7) Eskol 「創世記」14・13、24／「民数記」13・24、32・9。この言及の要点は「創世記」14・19にある。こ

の章でユダヤ民族の父であるアブラハムは、敗北の中から勝利を引き出し、メルキゼデク王によって「天国と大地の所有者」だと祝福される【同右】。

(8) Who lov'd... to make it free 【ヨハネの福音書】3・16「神はその独り子をお与えになったほど、世を愛された」【同右】。

(9) this veil remove 「コリント人への手紙」二、3・14「今日に到るまで古い契約が読まれる際にこの覆いは除かれず掛かったままです、それはキリストにおいて取り除かれるものだから」。この「覆い」については「鶏鳴」の三七行目とその注(14)「小考(八)32、34―35」参照【M・七四八】【F・二九二】。

(10) your rock 「申命記」32・4「主は岩で、その御業は完全である」他、神は救済の、避難の、等々の「岩」だと、旧約聖書では何度も言及される【RA・六〇八】。
(11) The lost Son 「ルカによる福音書」15・11―32の放蕩息子の話に言及【同右】。

八、六、四音節詩行を組み合わせ、変化に富む押韻構成の前半だが後半は大体交互韻の、総計四九行の作品。第二部の十七番目に配置されている。

今回最後にもう一篇、この詩集の究極の主題とも見做せ

そんな詩を取り上げておこう。

高潔 Righteousness⁽¹⁾

綺麗な、寂しい徑^{みち}！ その有難い陰は
潔白な老（預言者たち）がまず植えて飾ったものだが
私たち（その善良さをどんどん失ってゆく）に残して
くれたのだ 避難所をずっと、休める木陰木陰を。

誰なのか 汝の中を歩いてゆくのは？ 誰が好むのか
天国の密かな人気^{ひとけ}のなさを、あの綺麗な住み処を？
そこはキジバトが建て、気楽な雀が動き回って
明日の災いも未来の苦勞もない所。

誰なのか 廉潔な心を、誠実な眼を
清浄な汚れなき手を備えていて干渉されても不動なのは？⁽²⁾
誰なのか（目に見えないもの）が見え、⁽³⁾真底豊かにする
隠された宝を得る資格のある人は？

天上にある物どもを探し求めて

愛する 精神の

とにかく貧しい人は、意気もなく卑しい。

唯、静かで賢い者は

やはり家路を指して飛翔し⁽⁴⁾

前進は素早く、後退はこの上なくゆっくりだ。

その行動、言葉、主張には

全て一つの意味があり

一つの目的と目標がある、歩くのも自らの視力には依らず

両眼は共に見えなくされて

動き回るのだ

外部の光ではなく信仰によって導かれながら。

血を流すこともなく 棘⁽⁵⁾を

苦しみ悩む者たちの

寝台に撒き散らして彼らの破滅を急がせることもなく

彼らの持ち時間を

辛く悲しいものにして

〈慢性の〉苦痛⁽⁶⁾らしく、確実に殺すのだ 緩やかにだが。

大地には愛や怒りに

値いするものは何もないが 自らの希望と

〔岩〕には在ると知っている者はいつも喜んでいられる。

平和を探し追い求めるのも

容易にしかも健やかな

良心を備えていて それが得られそうな時にだ。

喜んで自らの十字架を担い⁽⁷⁾

自らの心と舌を

敵のためへの祈りに捧げる人、

支払われずに貸し与え

十分に援助をしなが

〔高利貸し共〕が強いるような賄賂は求めない人。⁽⁸⁾

怖れながら蒼白になつて

人間を眺めたりは決してせずに

〔神〕を確固として信頼する、そういう偉大な人の判断は

傲慢不遜ではあつても

塵の中で下されねばならないが

善良な人は 〔神〕の特別な宝なのだ。

このように振る舞い

こうした善行を悪事や

怠慢で汚さない人、そして怒りを

密かな墮落によって積み重ねたり⁽⁹⁾

何か蛇や雑草などを育てて

自らを欺いたりしない人、そういう人がこの径を歩くのだ。

〔M・五二四―二六〕。

訳注

(1) 「詩篇」15・1―5 ダビデの詩は、主の幕屋に宿り聖

なる山に住めるのはどのような人か、との問いに始まり、

「それは完全な道を歩き、正しいことを行う人、心にある

真実を語り、舌に中傷を持たない人、隣人に災いをもたら

さず非難しない人、主の眼に邪な者を蔑み、主を畏れる人

を尊ぶ人、己が心に誓ったことは変えない人、金を貸して

も利息を取らず賄賂を受けて無実の者を陥れたりしない人、

これらを守る人は決して揺らぐことはない」と詠われる。

これ及び、G・ハーバートの「志操堅固」〔Constance〕五

行詩七連計三五行の詩、W・L・二六二―二六五」での「正

直な人とはどのような人か？」に始まる確固たる道を守る

注意を参照 [M・七五一]。

- (2) which never meddled pitch 「朱に交わっても赤くならぬ」の意。「シラ書」13・1「やにに触れば手が汚れる」
He that toucheth pitch, shall be defiled therewith (Ecclesiasticus xiii I) 'meddle' = to deal with; interfere with. (OED meddle v 8d) [RA・六三二]。

- (3) Who sees *Invisibles* 「驢馬」[小考(八)43]の五行目「目に見えるものが精神を支配し」を参照[同右]。

- (4) homewards 「天国へ向かって」の意。「イエス泣き賜う」[(五)B][小考(六)32]の五三行目「私は…歌いながら家路につけるだろう」/「記九」明るく若々しい光よ」「小考(九)22」の五一行目「御身の羊を家へ連れ帰って下さい」/「嵐」[小考(七)17]の二八行目「：彼に家路を指し示す」/「申し出」[小考(十)3]の四五行目「汝の胸を家庭で充たせ」/「人間」[小考(六)26]の一九行目「自分には家庭があると知ってはいるが」と比較[同右]。

尚、この詩集では「home」は二三作品で二七回、複数形は三作品で各々一回ずつで三回、使われているが「homeward」は(この)での一回のみである [T・九九]。

- (5) nor spreads/Thorns G・ハーバート「知られざる愛」
"Love unknown" [七〇行の詩] W i l l 四五二―五八」の五一―二行目「寝台を物思いで一杯にした人がいたと知っ

た／私は棘だと言おう」と比較 [RA・同]。

- (6) pains 一六五五年版では「prayers」祈り」。何か軽くは看過できない語彙の違いである。

- (7) Who bears his cross with joy 「マタイによる福音書」16・24「それからイエスは弟子たちに言われた、私に倣いて来たい者は自分を否定し自らの十字架を背負って私に従いなさい、と」[RA・同]。同・25「自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、私のために命を失う者はそれを得る」と続く。

- (8) Who bears.. which Usurers impose この連、以下を参照。「ルカによる福音書」6・35「しかしあなた方は敵を愛し善いことをし、何も当てにせず貸しなさい。そうすれば報いは多くなり、至高の人の子らとなる。彼は知らずにも悪人にも、情け深いのみだから」。キリストはここでは暗に、「同朋に貸すには如何なる利子を付けてもならない」(申命記)23・19―20)に言及している [RA・同]。

- (9) nor feeds/Some snake, or weeds 王妃へのハムレットの毒づき「雑草に肥料をくれて臭い匂いを募らせたりなさるな」(シェイクスピア「ハムレット」III・iv・一五―二)及び、諺「胸中に毒蛇を育む」(いつか自分を裏切りそうなるを大事にする)「To nourish a viper in one's bosom」参照[同右]。

ABABの型で押韻する(第二連は疑似韻)各十音節の四行詩三連と、ABCCBの型で押韻する六行詩(各行の音節数は順に6 4 10 6 4 10)「六連目は6 4 11 6 4 11」七連から成る総計五四行の作品。

今回は、ヴォーンの実態をとにかく直に凝視することに主眼を置いた。次回で、第二部に見残してある若干の作品を見て、このヴォーンの代表作『火花散る燧石』の全貌を明らかにしたい。

*参考文献 本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はページの表示。

[A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical Poets*. London: The Macmillan Press, 1992.

[B] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London: The Macmillan Press, 1972.

[BE] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan: Characteristics and Intimations*. London: Colenden Sanderson, 1927; rpt. New York, 1969.

[BE-] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*.

Tokyo: Kodokan, 1952, 2nd ed.

[BE:] Blunden, Edmund. *Nature in English Literature*. London: The Hogarth Press, 1949. 1st ed. 1929.

[BE] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1986.

[B・A] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London: Edward Arnold, 1970.

[BS] Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London: Dennis Dobson, 1951.

[C] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.

[D] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1962.

[E] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London: Chatto and Windus, 1930; Penguin Books, 1961. 174-75.

〔岩崎宗治訳〕『曖味の七つの型』(研究社 一九七四) 三

111—111]°

- [L] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York: Doubleday. 1964; New York University Press, 1965.
- [LX] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston: Twayne Publishers, 1978.
- [G] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London: Oxford University Press, 1961.
- [GI] *Seventeenth Century Studies presented to Sir Herbert Grierson*. London: Oxford University Press, 1938; rpt. New York: Octagon Books, INC., 1967.
- [GE] Garner, Ross. *Henry Vaughan: Experience and the Tradition*. Chicago: University of Chicago Press, 1959.
- [I] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan: A Life and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press, 1947.
- [IW] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford: Basil Blackwell, 1929.
- [IWI] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford; 1932; rpt. New York: Haskell House, 1966.
- [IG] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets: A Casebook*. London and Basingstoke: The Macmillan Press, 1974.
- [IX] Hodges, Karen Lee, *The Hawk and the Flint: The Language and Structure of Henry Vaughan's Poetry*. Diss. The University of Arkansas, 1978. Ann Arbor: UMI, 2007.
- [I · O] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- [J] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [JI] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1865.
- [J · J] Lemonedes, Joyce Elaine, "A Gracious Art": *Nature in the Poetry of Henry Vaughan*. Diss. State University of New York at Stony Brook. August, 1976. Ann Arbor: UMI, 2007.
- [Z] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Ox-

- ford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957.
- [𐄂] Martin, L. C., ed. *Henry Vaughan : Poetry and Selected Prose*. London : Oxford University Press, 1963.
- [𐄃] Miner. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton : Princeton University Press, 1969.
- [𐄄] Martz, Louis L. *The Paradise Within : Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London : Yale University Press, 1964.
- [𐄅] Martz, Louis L. *The Poem of Mind : Essays on Poetry/English and American*. New York : Oxford University Press, 1966.
- [𐄆] Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation : A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven and London : Yale University Press, 1962. 1st ed. 1954.
- [𐄇] Nelson, Holly Faith Josephine. *The Scriptural Texture of Henry Vaughan's "Silex Scintillans": The Poetics, Politics and Theology of Intertextuality*. Diss. Simon Fraser University, April 2000. Ann Arbor : UMI, 2007.
- [𐄈] Pettet, E. C. *Of Paradise and Light : A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge : Cambridge University Press, 1960.
- [𐄉] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes : English Lyrics in a European Tradition*. The Hague : Mouton, 1973.
- [𐄊] Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan : The Complete Poems*. New Haven and London : Yale University Press, 1976.
- [𐄋] Richardson, Judith Elaine. *The Retreat to Nature and the Call of the World : A Study of the Conflicts in Henry Vaughan's Poetry*. Diss. University of California, Los Angeles, 1975. Ann Arbor : UMI, 2007.
- [𐄌] Simmonds, James D. *Masques of God : Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh : University of Pittsburgh Press, 1972.
- [𐄍] Strong, James. *The Exhaustive Concordance of The Bible : Showing Every Word of the Common English Version of the Canonical Books, and Every Occurrence of Each Word in Regular Order ; Together with a Comparative Concordance of the Authorized and Revised Versions*,

- including the *American Variations*. New York and Cincinnati: The Methodist Book Concern, 1894; rpt. 1926.
- [56] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London: Faber and Faber, 1993. [ロナルド・シュートンズ編注『T・S・エリオット・メタリック講演』村田俊一訳(松柏社 二〇〇一)〕。
- [57] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry: Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y.: Kennikat Press, 1939.
- [1] Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery*. The University of Chicago Press: 1947; rpt. Phoenix Books, 1961.
- [11] Tuttle, Imitda. *Concordance to Vaughan's SILEX SCINTILLANS*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1969.
- [M] Whittier, John Greenleaf. *Anti-Slavery Poems: Songs of Labor and Reform*. London: Macmillan and Co., 1889.
- [M9] Williamson, George. *The Donne Tradition: A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley*. New York: The Noonday Press Inc., 1958. 1st ed. 1930.
- [M9-1] Williamson, George. *A Reader's Guide to the Metaphysical Poets*. London: Thames and Hudson. 1968.
- [MH] White, Helen C. *The Metaphysical Poets: A Study in Religious Experience*. New York, 1936; rpt. New York: Collier Books, 1966.
- [M-1] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.
- [90] Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam・London: North-Holland Publishing Co., 1974.
- [荒川] 荒川光男「黙想詩「夜」を読む」(『十七世紀英文学のポリティックス』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九〇。一八一—一九七)
- [川崎1]「ハンリー・ヴォーンの自然神秘主義」(川崎寿彦「薔薇をして語らしめよ―空間表象の文学」名古屋大学出版会、一九九一。一七四—一九八)
- [川崎2] 川崎寿彦『鏡のマネリスム―ルネッサンス想像力の側面』研究社、一九七八。一五二—一五八。

〔松崎〕松崎毅「ルーパート王子と「鷺」——ヘンリー・

ヴォーンの世俗詩と検閲をめぐる論考——」〔十七世紀
と英国文化〕十七世紀英文学会編、金星堂、一九九五。

一七二—一九二

〔プⅠ〕大槻真一郎責任編集『プリニウス博物誌植物篇』

新装版、八坂書房、二〇〇九。

〔プⅡ〕大槻真一郎責任編集『プリニウス博物誌植物薬劑
篇』新装版、八坂書房、二〇〇九。

バイブル

〔A V〕Authorised Version (of the Bible). 別称 King

James Version. 欽定訳聖書。The Holy Bible containing
the Old and New Testaments Translated out of the
Original Tongues and with the former Translations
diligently compared and revised by His Majesty's special
command, AD. 1611. Appointed to be read in Churches.
(London: The British and Foreign Bible Society).

〔G B〕The Geneva Bible: The Annotated New Testa-
ment 1602 Edition. Ed. by Gerald T. Sheppard, with
Introductory Essays (New York: The Pilgrim Press,

1989).

〔N B〕The New English Bible with the Apocrypha.
(Oxford University Press Cambridge University
Press, 1970).

〔聖書〕新共同訳 旧訳聖書続編つき（東京・日本聖書
教会 一九八九年）

尚、本「ヘンリー・ヴォーン小考」でのバイブルは、
勿論ヴォーンが知らないものなのでこの新共同訳では
なく、それを参照しながらではあるが、権威ある英訳
標準版「A V」の、なるべく忠実な拙訳である。

本誌連載のこれまでの拙稿は左記のように略記、算用数字はそ
のページを表示。

〔小考 (一)〕「アスク川の白鳥——ヘンリー・ヴォーン小
考」〔成城文藝〕第一九九号、1—24、二〇〇七年六月。

〔小考 (二)〕「その瞑想を追い始める——ヘンリー・ヴ
ォーン小考 (二)」〔同〕第二〇〇号、47—67、二〇〇七
年九月。

〔小考 (三)〕「〈死〉からの再出発——ヘンリー・ヴォーン
小考 (三)」〔同〕第二〇一号、13—33、二〇〇七年十二

月。

〔小考(四)〕「序文」と「反歌」に包まれて——ヘン

リー・ヴォーン小考(四)」「同」第二〇二号、1—32、

二〇〇八年三月。

〔小考(五)〕「複眼による並置比較思考——ヘンリー・ヴ

ォーン小考(五)」「同」第二〇三号、1—27、二〇〇八

年六月。

〔小考(六)〕「追求は異なる角度、視点から——ヘン

リー・ヴォーン小考(六)」「同」第二〇四号、15—42、

二〇〇八年九月。

〔小考(七)〕「花と星へ 嵐と夜から苦悶に耐えて——ヘ

ンリー・ヴォーン小考(七)」「同」第二〇五号、13—43、

二〇〇八年十二月。

〔小考(八)〕「隠された宝」へ向かって——ヘンリー・ヴ

ォーン小考(八)」「同」第二〇六号、17—66、二〇〇九

年三月。

〔小考(九)〕「哀歌に託す自己励起——ヘンリー・ヴォ

ーン小考(九)」「同」第二〇七号、1—33、二〇〇九年六

月。

〔小考(十)〕「昇天と復活への思い——ヘンリー・ヴォ

ーン小考(十)」「同」第二〇八号、1—28、二〇〇九年九

月。

〔小考(十一)〕「独立と連合と——ヘンリー・ヴォーン小

考(十一)」「同」第二〇九号、29—59、二〇〇九年十二

月。

拙訳でのへ～付きとゴチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で
始められる語句とイタリック体部分である。

*本稿は二〇〇八年度成城大学文芸学部特別研究助成による成果
の一部である。

補遺

本稿二作目「呼び掛け」の押韻構成の型と各行の音節数

第一連 6 4 8 4 4 4 4 8 8

A B A B C C D E E

第二連 7 4 8 4 4 4 4 4 8 8

A B A B C D C D E E

第三連 8 4 8 4 4 4 2 6 8 8

A B A B C C D D E E